論 文 の 要 旨

氏名　佐々木孝博

論文題目　情報空間におけるロシアの安全保障に関する一考察
　　－戦略、実施体制及び事例研究を中心に－

論文の要旨

本論文は、ロシアが関与したとみられる近年のサイバー攻撃事例に鑑み、情報空間（サイバー空間）における安全保障上のロシアの狙いを明らかにすることを目的とし、主として、情報安全保障戦略の一次資料を丹念に読み込むことにより研究を行った成果である。

まず第１章において、ロシアの情報安全保障戦略（サイバー戦略）の詳細及びロシアが他国と締結した協定の詳細とそれらの狙いについて考察した。

ロシアは情報空間（サイバー空間）における安全保障を国家安全保障の重要な１つの分野と位置付け、特に、同空間を単なる通信・情報インフラとして捉えるのではなく、情報戦をはじめとする紛争が生起する領域として、陸、海、空、宇宙に次ぐ第５の領域と捉えている。そしてその領域において、優越を確保することが国益を担保するためには必須であると考えている。そのために、同領域におけるロシアにとっての脅威はいかなるものなのか、その脅威にどのように対抗していくのかを、「国家安全保障戦略」「軍事ドクトリン」などの公文書で明確に規定している。

さらに同空間における戦いは１つの国単独では対処できない事項でもあり、それを補う形で中国との間で「サイバーセキュリティ協定」を締結している。この協定は、相互にサイバー攻撃を実施しないことにも言及しており、サイバー空間における相互不可侵協定ともいえる合意文書である。

これらの多岐にわたる戦略や協定を通じ、情報空間における安全を担保しようとしているのである。

第２章では、ロシアのサイバー戦略を具現化するための国家体制・態勢、ロシア軍に新たに創設された「サイバー軍」及び情報組織（インテリジェンス組織）などについて考察した。

ロシアでは国家安全保障会議、軍や情報機関を中核としたサイバー戦を遂行するための体制が構築されている。民間組織も、サイバー戦を行うための潜在的能力を秘めており、国

家を支援している。

ロシアは平時とも有事とも判断のつかない時期に、目に見えた形でのサイバー攻撃（物理的な被害を伴うようなサイバー攻撃）を他国に対して実施する可能性は低いとみられるが、軍や情報機関及びその影響下にあるその他の組織を使って、他国の安全保障上の情報を偵察するインテリジェンス活動や、偽情報等を流布することによる影響工作を行っている。

またグルジア（ジョージア）紛争事例などが示すように、国益が衝突するような緊張状態や紛争状態に至ったならば、積極的にサイバー攻撃を実施することもあり得る。

第３章では、近年、ロシアが推し進めるいわゆる「ハイブリッド戦」という戦い方の狙いを、主としてロシアの立場から考察した。また、それを検証するために「ウクライナ危機（クリミア併合）」及び「米国大統領選における世論操作・情報操作」を事例研究として取り上げた。

それらの考察から読み取れる「ハイブリッド戦」を推し進めるロシアの狙いは、一義的には、地政学上、ロシアの安全保障を確かなものとするために絶対に死守しなければならないと考えている「旧ソ連諸国＝独立国家共同体（CIS）諸国」をロシアの影響下に置くためにはどうしたらよいかという観点から生み出された戦略であるということである。

ロシアの国益を担保するためには、CIS 諸国において、まず、情報戦・サイバー戦等の非軍事手段により政権を掌握する。そのあとに、要すれば軍事手段に移行し事態の収拾を図るということである。両者の割合は、ゲラシモフ露軍参謀総長によれば「４：１」で圧倒的に非軍事手段の占める割合が高い。

第４章においては、「ハイブリッド戦」で重視される「影響工作」について、EU が設立した「欧州ハイブリッド脅威対策センター」などがまとめたレポートを基に、その詳細を明らかにした。

ロシアは多彩な手段、手法、種類による影響工作を実施してきている。特徴的なのは、従来のメディア（新聞・テレビなど）を活用したプロパガンダ活動よりも、情報空間（サイバー空間）を利用した活動に主眼があるということだ。SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）の登場により、情報拡散は非常に容易になり、それを実施する主体（国家、組織、個人）も秘匿できるということである。これらの特徴を最大限に利用し、以前とは格段に進化した影響工作を実施してきているということだ。

第５章においては、本論において考察しているサイバー戦略とロシアがこれまで推し進めてきた核戦略との類似性について考察した。

情報空間（サイバー空間）というものは、地理的な領土・領海とは異なり、主権の概念や安全保障のために自己の勢力圏を拡大するという概念が適用できない領域である。ロシアは、ソ連時代から国境の外側に勢力圏を確保することで自国の安全をより確実なものにしてきたが、このような領土・領海と同様の施策を適用できないのが、サイバー空間での安全保障である。

そのためロシアは「情報安全保障のための国際行動規範」や「国際情報安全保障条約」の

制定を国際社会に訴え、サイバー空間における軍備管理を推し進め、同分野における国際的な枠組みの確立に積極的な関与をしていく姿勢を強く示した。その狙いは、欧米諸国や中国などのサイバー能力の高い国による脅威を、自己の情報通信技術（ICT）の向上のみによっては抑えきれないため、同条約等により、ロシアにとっての不利益な行動を封じることにある。この考えは、核兵器における技術や財源に劣ることから、戦略兵器削減条約（START）、中距離核戦力（INF）全廃条約などを推し進め、米国の脅威を抑える施策を採用し、米国との対等を目指した経緯と類似している。

第6章では、ロシアが2019年頃より危惧しはじめた「サイバー空間における脅威と核の脅威の関連性」について、国際会議におけるロシア側の発言を基に考察した。

近年ロシアが推し進める「ハイブリッド戦」という戦い方において重視されるのは非軍事手段であり、その中でも「情報戦・サイバー戦」といったことに注力している。

ロシアは、これらの領域での戦いにおいて優越を確保するために非軍事手段を重視した戦略を実行しており「戦わずに勝つこと」を目指している。しかしながら、非軍事手段を重視する戦略の中においても、核戦力を拠り所と考えている。

一方、ロシアが重視する非軍事手段のサイバー空間での戦いにおいて、その脅威が核の脅威にエスカレートする可能性を非常に危惧しはじめていることが明らかとなってきた。ロシアが平時から有事にかけて重視している非軍事手段によって、最後の拠り所と考えている核戦力に悪影響を及ぼしてしまうというジレンマを感じているということだ。それを国際枠組みや条約によって抑止しようと考えている。

最終章（第7章）では、ロシアが近い将来、情報空間（サイバー空間）においてAI（人工知能）をいかに軍事適用していこうとしているかを、「AI発展戦略」を中心に考察した。

ロシアは、現代戦において情報戦を中心に位置づけていることは間違いない。そのなかでも、特に情報操作を始めとする影響工作に焦点を当てているとみられる。

ロシアはAIを、情報空間での覇権を得るためのゲームチェンジャーとしての技術と捉えており、2030年までに、AIを使って米中の覇権争いに割って入ろうとしている。今後、ロシアがAIを情報安全保障分野においていかに活用しようとするのかを注意深くみていく必要があり、特に、自律型致死兵器システム（LAWS）の危険性を考慮していく必要がある。

これらの考察を総括すると、以下のとおりである。

ロシアは情報空間（サイバー空間）において、綿密に脅威分析を行い、戦略を策定し、それを具現化している。そして、その戦略を具現化するためには、どのような国家体制が必要なのか、どのような枠組みで施策を実現すればいいのかを検討した上で、ストーブ・パイプに成りがちな国家組織や関連する民間組織を統制・調整するために、「国家安全保障会議」の枠組みを効果的に利用している。また、情報空間において戦うための組織としてロシア軍に「情報作戦部隊（サイバー軍）」を創設した。同部隊は、サイバー攻撃や攻勢的なプロパガンダ活動の実施などを通じ、情報空間における優越を確保するために創設された実働部隊である。

さらに、近年のロシアは、「ハイブリッド戦」という戦い方を打ち出し、新たな世代において国益を確保するための戦いを実行に移している。その戦いにおいて重視されるのは、非軍事手段であり、非軍事手段と軍事手段の割合は４：１で圧倒的に非軍事手段の占める割合が大きいとしている。さらに、非軍事手段の中でも特に注力しているのが「影響工作を中核とした情報戦」である。影響工作での戦いは人間の意思決定を左右する「認知領域」での戦いとも言えるだろう。

しかしながら、非軍事手段を重視する戦略の中においても、ロシアは核戦力を拠り所と考えている。ロシアが重視する非軍事手段（特にサイバー空間での戦い）において、その脅威が核の脅威にエスカレートする可能性を非常に危惧していることが明らかになってきた。具体的にはサイバー攻撃により核兵器のコントロールシステムが管理できなくなることを危惧しているということだ。それを、国際枠組みや条約によって抑止しようとも考えている。

これらの現状に加えて、ロシアが近い将来、サイバー空間においてAIを活用し、それを如何に軍事適用していこうとしているかを、2019年10月に「AI発展戦略」として内外に示した。ロシアは、今後、情報空間（サイバー空間）においての安全保障を含めて、ゲームチェンジャーたる技術のAIを最大限に活用し、米国・中国が先行する覇権争いに割って入ろうとしているのである。